

雜 錄

進化論と社會科學との關係

Dr. Albert E. Friedrich Schaffle 著

今 野 秀 輔 譯

緒 言

ドクター、アルベルト、シエフレ (Dr. Albert E. Friedrich Schaffle) 氏は獨逸の國民經濟學者にして且政治家なり。西曆千八百三十一年二月二十四日を以て、ウキルテンベルヒ (Würtemberg) のニルチンゲン (Nürtingen) に生れ、千九百三年十二月二十五日スツットガルト (Stuttgart) に於て沒したり。彼は始め神學を志し、一八四八年チービンゲン大學に (Tübingen) 學び、千八百六十年の秋同大學の國

民經濟學の教授となれり。千八百六十二年より六十五年迄、ウキルテンベルヒの國會に議席を占むるに至り、後千八百六十八年獨逸の關稅議會に列したり、此年維內大學の正教授となる。一八七一年ホーエンワルト (Hohenwart) の内閣成立する時商務大臣となりたりしが、同内閣の瓦解後スツットガルトに於て再び學術上の研究を續け逐次著名なるものを出版せり、就中其主なるものを列舉すれば、

一、國民經濟學或は一般經濟學 (Die Nationalökonomie oder allgemeine Wirtschafts-

chaftslehre, 1861 Leipzig)

- 一、人類經濟の社會的制度(Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft, 1867 第三版 (1873 Tübingen)

- 一、資本主義の社會主義 (Kapitalismus und Sozialismus, 1870)

- 一、社會的團體の構造と生活 (Ban und Leben des sozialen Körpers, 1875—78)

- 一、論說集 (Gesammelte Aufsätze, 1885—1887 2Bde Tübingen)

- 一、獨逸の重要問題と時事問題 (Deutsche Kern-und Zeitfragen, 1894) 等

其他學界に盡したる事多かりしかば、千九百一年同氏の滿七十歳に達せし時、^{Karl}ビュール其他専門の大家五名は、^{Karl}シエフレンのために紀念の圖書(Festangaben für Albert Schäffle)を發行して長壽を賀したりしが其翌年歿したのである 上記の論說集(Gesammelte

e Aufsätze 1ter Bd 1885 Tübingen)を所藏せられある武藤教授より借覽して、前記題目の一篇を擇び拙譯を試みたり。譯語等の妥當ならざるものあらば教を賜はらん事を望む。

總 論

吾人は陶汰學說の社會科學上に與へたる功績を沒却せざるのみか、寧歴史的に知られた文明社會は、陶汰の眞理が生存競争に依り、事實として完全に立證せられ又單に假説として信せしめざる處の唯一の範圍なりといふ事を主張する。

文明の最初の起原は、不明の事實なるも、實驗上知られた社會的事實に關係せる陶汰學說は、有利なる根據を基礎としてゐた。遠大なる時限に互り、直接の觀察に依りて決定せられたる種族の構成に關する假定説も、社會學の發達學說と關係がない。又社會學の觀察すべき事象の定義も、理解し難い肉體によりて認められざる程の些少のものでもない。社

會生活の精神的事實の結果も、社會學の範圍を脱するを得ない。文明の發達に關係ある精神的事象も、研究し難い事でもない。社會的進歩及び退歩は（我等の時代に於ても）我等は觀察し得るのである。直接之を觀察するが爲に、數千年數十萬年を必要としないのである。例令社會的發達現象は、夫が特別の性質に従つて觀察にも特有の方法を要すとはいひ顯微鏡を以て研究せねばならぬ事象でもない文明とは人類の精神を具體化する範圍であつて、長期間其精神的產物により、心理原始的に、文化史より觀察せられた社會學説は、故に發達の點に於ては、動物學より優れたのである。

社會の發達は、實に生存競争といふ強制的決定による繼續せる變化と、適應と、遺傳に基きて起るのである。此地盤は社會學の發達説と動物學の夫とは、共通のものである。然れども人類相互間の又自然を利用せる社會組織の生存競争は、直接見れば直ちに特性ある

主體、秩序、利害の目的物、武器と戦争手段適應及び遺傳の形式、生存競争及び利害競争の特性ある種類及び結果を示す。進歩的な生存競争の是等の狀態の特質に基きて、其事情により影響をうける眞の人類社會組織の特性は生ずるなり即ち文明の實體が生ずるのである。

此特性は、社會科學上重大なる利害關係を有す、其科學の主なる任務は、此特性を發揮せしむるにある。吾人は此任務を動物學者に豫期することも又委任する事も出来ない、豫期されぬ？其理由は彼等は零細なる仕事以上のものを成就し得ざる程、人類社會の事實に關する専門的宇宙上の研究は、其距離餘り遠いからである。委任されぬ？それは社會的發達に對する陶汰學説の形式は、社會發達學説に多少獸性を附加するを要する動物進化の事實にのみ偏して、標準をとる事を非難さるるからである。

然るに一流の動物學者は、二三の有力な權

柄ある言論のみにて、社會科學に交渉あらしむるには其關係乏しいのである、才能の大なるを示したるはダーヴィンである（千八百九二年二月に生れ千八百五十九年十一月種の起原を著し學名大いに著はる）彼はCaldonガルトン及びCroftグレックの研究を利用して社會生物學界に彼の學說の興味ある適用を研究した、彼は其隨時的の意見を述べて社會淘汰の現象を簡單に解釋せんとは欲しないで、文明の進歩は最早全く粗暴なる生存競争に基づくものでなしとの見解を述べた。且自然淘汰の全體（人類社會並びに獸類）の發達の事實を抱括する形式を設定するを中止した。

文化の進みたる國民に於ては、恒久的進歩は其度著しからねども自然淘汰に支配せらる如何となれば文化民族は野蕃民族の爲すが如くに互に補充又撲滅することはないからである。野蕃民族の爲すが如くにせぬだらうか。

然り、乍併生存競争の行はる場合は常に戰爭狀態に於てのみならず所謂平和狀態に於て

も文明社會に滿ち渡つてゐる。生存競争の強制的決定より起るその施設により、勝利より敗北より、侵害よりして、建設も生じ不具も生ずるのである。社會の發達はその最も高き事實即國家の或立や擴張及び興亡に至るまで暴力の衝突、欺偽的なる不當利得、平和的利害競争及び相互の競争の結果である、此競争に關し科學のため統一的計畫的に指導する人なきを以て、我等は社會の發達は自然的淘汰の結果云謂生存競争の淘汰の結果と見做さねばならぬ、我等の理解するが如く、文明の恒久的進歩は自然淘汰による事は尠しとせないのである。社會上の自然淘汰の特性ある現象吾人のこれより述べんとする社會淘汰の現象を一層精密に觀察せんとす。

第一章、協力の競争と社會自身の事實、

人類相互間又は自然との競争は、協力の勢力にて行はるる、生存の競争場裡に表はるるは團體の主體及び團體力益多くなる。既に人類に發表する能力を與へられたる言語と理性

の能力、これに基づき人類團體を維持すべき最も肝要なる要素は、他の箇所 (Bau und Leben建設と生活) にて指示せし如く、人の欲望増加すると共に團體的生存競争益烈しくなるに至りしなり。社會の最高の事實すら、社會科學に於て淘汰學說に依りて説明しうらる。

經驗に徴するに人類社會は狭き游牧民時代より、文明の隆盛となれる國家、又は交通區域となるまで發達せしものなるを知る、此發達は戦争又は無數の競争の影響として表はれた事を知るのである。此競争又は闘争は歴史に記述せらるる人間の統御術を有する事實を描寫せしものでもなく、人類統一の計畫を缺きたる衝突、生存競争を示したるものにして換言すれば自然淘汰の出來事たるを立證するのである。

若社會の發達が歴史に依り歸納的に立證せらるるものならば、その發達は又演繹的にも進化説により推論するをうるのである。例へば最も支配するに適應せる實體 (人間) は主

權者の位置にまで達するを得た。世界を支配せる孰れの民族も事實上の發達史を通覽するに、最高の權力を得た事に依りて世界的民族になりえたのである。最高の力は個人の共同によりて生れ、殊に社會的に團體的に向上進歩せる中にも言語上、又は精神上最も良く教養せられた個人の結合力にて達せられる。文明民族とは元來半ば個人であり、半ば低級の共同集合體で、分業に適せる精神的の個人を組織的共同作用に依り、如斯大なる團體になりしものである。その特別なる活動範圍内で最大の力を發揮する可能性ある意力の共同作用によるの外、他の方法にてはかかる多數の力を構成するは困難である。約言すれば文明社會とは最大の活生ある集合體で、最も高きものとして引續き向上する現世界の權力として、自然的創造過程の漸進的淘汰によりて生ずるものである。此世の創造物の首位にある社會組織たる文明は、經驗上確定的事實たるが如く發達學說の歸納的の必要なる歸結であ

る。社會といふものの概念は發達學說によりて十分な併し簡單なる原始的基礎を有するのである。社會科學は勿論此最初の概念にこれまで十分なる説明を與へてなき様なり、否一般に社會科學は原始的な調査をもなさぬのである。

人類社會は常に人間の共同によりてのみならず、又人間と財との結合により又生物、無生物の利用し得べき物體の助けによりて大なる權力となるのである。寸鐵なき人類の力は他を結合せしむる力もなく又最大の權力を構成する事も出来ぬのである。貧しき民族は滅亡する事、又人間は財産の力に依りて支配者となす事なり得し事を經驗の示すところである。文明とは結合せる人間力及び自然力である。國民の財産とは自然に打ち勝ちて生産物を得たる結果であり、其分配とは人間同志の所得競争の敗北である。文明の國に達する物質的増加は夫故同様に一般の淘汰の過程によらぬものでなく、寧ろ是に依りて其増加するを得た

のである。

社會は強大なる結合體として國家を形成す。社會は國家に於て統一せんとする意志を有し統一せる權力を備へたる集合團體である。自然の優勢なるもの及び人たる敵と戦うて之に打ち勝ち殘存せんとする生存動機即ち其努力は、一致協力の意志を有するに至らしめ、協同行爲をなすに至らしむ、生存競争の經路益進むに従ひ國家統一の標準も高めらるるのである。其理由は益大なる自然の危險もあり抵抗もあり、又國內及び國外の強敵を征服せねばならぬからである。

現在の民族の力にある國家統一的の教育により常に必ずしも國家組織を強めるを得ずして、他の團體と提携するにより(同盟、聯盟等)で強さを増大せし原始民族の團體は他の民族より滅亡せらるるか、稍高度の國家統一のため征服せられたのである。生存競争の必要上恒久的に又相當なる程度に、團體を國家的結合を促したのである。國家の發達は概して云

へば自然淘汰の結果である。

其意志の統一、權力の統一の形態をなしたる人類社會に換言すれば國家に或任務が自然に存するのである。此任務はいかなる點にあるならんか。これ統一意志に適用せられた國家の總權力に反抗せる狀態を征服する事、及び社會の意志及び權力の統一を妨ぐるか又は弱めんとする團體若くは狀態を征服する點に其任務は存するのである。國家の任務として起るものは、陸軍制度、強き自然に背く階級を征服すべき大なる公役、困窮の狀態にある下層民の保護又は社會のために暴力、欺瞞の競争を抑制する事等なり。如何となれば外敵の征服、ある強き自然力を征服する事は全國の共同力によりて始めて遂行するをうるものにして、國內の野蕃的なる暴力欺瞞の競争は社會の統一及一致の上に於て社會を妨害するのである。吾人の經驗は、國家の職分は眞に表記の團體に於て代位せられたるものなるを立證するのである。國家の活動の實驗的限界

は淘汰論の結果と全く一致するのである。

他方文明人類の維持は國家が意志及び行爲統一上結合せし人人の爲に、自己保存の競争を行はしむる事を條件としない。又各機能を國家に集中し、國家の保護によりて人類生活の最高權力は達し得られない、又社會内部の競争は中止するを得ざるものにして、暴力欺瞞の争のみを休止するをうるのみである。效果ある各種の競争及び言論の戦は、社會の進歩に有效なるものにして、平和的種類の競争は國家にて立法及行政上獎勵すべきものである。

社會が生存競争に残存する爲になすべき事を國家により爲されざるを要する。統計上社會の各部門が自ら決定したる自己保存の場合が多い、此各部の者は夫に拘はる問題を十分の努力を以て一層完全に解決する、社會も相互に競争する時に最も完全である。各部門自己保存の爲にする平和的競争は、社會團體をして其範圍で進歩を促すものにして、目下行

はれてある自然淘汰の肝要なる事柄である。是を否定するは恰も文明進歩の基礎を否定するに等しいのである。個人及び團體の自由競争を除外せる社會主義は社會を逆轉せしむる事になるであらう。

自然、敵及同胞と競争して生存競争の爲に戰ふ獨立の分割力は社會上の競争主體であり其種類も多いのである。これは個人であり家族であり又は人爲的の團體である。後者は自由の(個人的)組合、營利會社又は地方的或は職業的連帶責任ある會社、公法に依れる自治權のある組合、共產主義團體及び職業團體の如き結合である、總ての是等の部門に自治の大部分は委ねられてゐる、個人行爲、組合の活動公法上の自治體の競争區域は盡る事ないだらう。個人及び家族の力に及ばざる任務は益多くなるであらう。故に國家は個人の自治及び家族生活に關與するを要せぬ。自由なる個人組合の力の些細なる集合力並びに職業上及び地方的自治體の結合は往々十分なる力

を有し、國家よりも優れた事をも爲しうるのである。

國家の外に繼續的變化と構成とを示したと歴史的に思考せらるる社會的勢力及び主體となるものに、家族、個人、社會、團體の如き單位が無數にある、自然と敵と又は同胞と生存競争中社會的淘汰の永續的作用は最も活動性ある主體及び權力體を有効に又發達をなすに至らしむ、最も強き者勝つ、種々の任務に對しては或は個人或は個人組合或は自治體が最も強き力たるを立證す、種々の主體形は故に各専門的立場に於て互に適用し合ひ、生存競争によりて得たる堪能力は、専門的活動性によりて有效ならしむるのである。個人並びに家族の活動の擴大、公私兩權にて認められたる各種の組合の有効範圍の限定は自然淘汰の結果そのものである。

社會は、第二には心的の競争の持續を概して除外せぬ、競争は大なる集合力となりて殘る事もある。又其力は例へ其人々が互に物質

的又は理想上の利益を得んと競争する時と雖も、全體を維持する競争では、國家として最高の權力を保つ事になるのである、此心の競争は公益觀念及び愛國心を犠牲にして利己主義を涵養するか若くは其心の競争が總體の力を破壊するか又は弱めんとする獸的根絶戰の如き形態をとりて、社會各自の統一的共同作用（意志と行爲に）反する時は排すべきである。個人、組合及び自治體の物質的、理想的利益に關せる競争収入、財、評判、名譽、支配的地位、選舉等に關する競争は、皆公益觀念及び社會全體の單位若くは要素を破壊するものではない。其外云謂平和狀態に於て社會の内部を充たす處のかの生存競争及び利害競争の分裂的影響に對しては特殊の道德的豫防法が有効である。結局此競争は夫に依りて物質的又は理想的の勝利が全體に對する功績の報酬として與へらるるが如き形態をとるであらう。社會の精神的競争は一致の惡影響や分裂的利己主義を養ふ事なく、かかる競争に公

益的影響を與ふる限り、社會の進歩上有效なものである。これ社會生活の各方面に於て、各の團體を刺戟し全力を盡さしめ、支配權を得、其發達を來たし、健全なる理想の勝利を博する處の持續的淘汰である。文明の進歩は故に、平和狀態のためには繼續的競争と其競争による淘汰とを要するも、其競争の中には暴力もなく欺瞞もなく、財の價值、人間の價值、理想の價值が勝利の決定的基準となり、又一層價值あるものの淘汰には理性を以て考慮する要ある競争である。權力強き團體として又國家として表はる其社會の同一範圍内に於ける任命、選舉票數の競争、才能の立證によれる任官者、被選舉者の淘汰、又は合宜的基礎によれる政治上の理想の言論を見出しうるだらうか、疑の存する所以である。

善良なる國家組織の完全なる建設は有效なる競争及び淘汰の効果に基づくものである。

第二章、社會の變化、適應、遺傳の現象
社會の創造過程の基礎は、變化といふ繼續

せる河川であつて、個人も組合も團體も、將國家も、精神的肉體的に、人並びに財の成立も夫に支配さるるのである。外界の變化、自然生活の變化は已に社會的變化のために行はる。新子孫の發生、新らしき理想の發現も其變化に影響をなす。物質的利害の競争又は理想の言論の戦に勝ちたる度に變化を來たす。常に新しき社會上の或は高き或は低き位地發生し、時代を支配する意見も行はるるもあり又は其儘滅するもあり。利得競争の交互に起る事件は國民の財産分配を變更する、彼此の理由により社會は日日闘争の主體又は常に新らしき時運に支配せらるるの結果となる。

社會的變化は概して適應的の變化をする時と適應せざる時とあり、併し乍ら文明の度高き程多く天賦の才ある適者存し、惡意ある不適者も存在するのである、秩序的に適應せる個人の力、集團の力は、戦争的又は平和的競争に陥るけれども合理的適應よりして急速なる進歩が起るか又は我等の文化發展上認めう

る完全性を備へたるもの起る事必然である。生存の激烈なる競争にて尠くとも殘存し、出來うる限り向上する爲に秩序的自覺せる適應を行ふ、この適應性は亦國家の手を経て、公共團體に依りて促進せられ且實施せらる、例へば公立の學校教育の制度、徒弟養成機關及び軍隊的設備あり。社會的自己保存に要する力が、益大となる故に社會適應の標準も高まり、社會に適せしむる統一的共同施設も必要となり、精神的教育には藝術的教育の機關も表はるるのである。社會的適應は、社會生存能力の教育と等しく常に内容的になる。

最も強き社會的生存力は専門に陶冶せられたる勢力を共有にするに依りて達せらるる、通俗的慣用語にて申せば、此社會的生存力の適應を勞働の集合及び分配と名づく。

各の生存の障害に對しては卓越せる専門的の勢力を錯雜せる生存の障害に對しては殊に適切なる勢力を、反抗の總體に對しては種々なる特別の勢力の總體を設定することは、

社會的勢力の構成の祕密で、其内容は所謂分業なり。分業は合理的なる順應なり。社會的生存競争の速に働きつゝある磨車は、殊に急速なる高度の分業を強要する、これ社會の淘汰に於ては生存能力ある權力の請求權も、甚だ速かに向上するからである。分業若くは適應的隔離、"Divergente Anpassung" (註、生物は適才必ずしも適所をうるに限らずして甲の職業に適するも四圍の關係上乙の職業に習熟して適所をうる結果となる如きをいふ)は、集業と關連して各般の生存競争上出現する、殊に高度の分業は、社會的淘汰の動機たるに止まらずして必然的產物なり。

この變常の適應は乍併動物界に於けると等しく、社會的生活にも行はる。各競争主體は特別の適應を勝者として或は敗者として表はし夫に依りて、其生存能力は最も大となる、如斯くして種々なる場合を生じ、社會的適應の隔離の種々あるにより社會的生活のマキスマム (Maximum) が出來うるのである。

適者も、最適者の淘汰も一つの計畫より免がる事は出來ぬ、互に並立して行はるる數多の競争に於て、肉體的、精神的、經濟的又は強き競争者側が、各獨立的勝利を得て生存す。社會淘汰は其間に強者の勝利として行はるる、人爲的にして益合宜的の順應性あるに拘はらず、自然淘汰の特有形式にして決して自然淘汰の例外ではない、況んや宇宙の自然淘汰の社會の進化を包括せる形式に立脚すれば、動物飼養者の手續即ダルザインの自然淘汰と名づけたるものは社會に於ける自然淘汰の或特別の事件で、社會の利害競争の勝利をうるための人爲的適應に過ぎない、卸賣、名譽若くは賞與のために、動物飼養者は適者の中より猶一層の適者を養ひつゝ健闘するのである。

社會的發達のためにも亦遺傳の原理も標準となる、尤も權力ある社會的單位も互に勢力を維持せんとし、その人的、物的、經濟的及び政治的優逸權を嗣がしむ、最も弱き單位は

零落して將來の發展には無影響となる、社會的生存能力の階級として表はるる社會的無數の階段に種々の生存體あるが、是等は單に夫自身の功績によるに非ずして、兩親の生殖及び教育行為に依りて肉體的及び精神的に又遺産相續により、又は權利繼承によりて彼等に社會的生存に必要な才能を遺傳せられたるものなり。乍併是等の遺傳現象も人類社會の發達の際に特別に形成さるるのである。

肉體的遺傳は又社會的に遺傳の實體保持者なるが併し唯一のものでもない、狹義の相續の財産の交附、口碑、練習、教授及び政綱によれる過去及び近代の理想の教育的財寶の交附も之に加ふる事となる。物質的遺傳に關しては常に兩親又は親屬の財産を子孫に譲渡するのみならず、設備上の財産を職業の後繼者に管理せしむるに至る、始め只一個人のみが得たりし精神的最良の適應を成るべく多數のものが、之を享受する爲に社會は皆合理的に支配し得べき相續事件に關與す、教授、國民

教育、體操、一般に普及せらるる圖書館及び美術陳列館の如き公益ある提供は個人の肉體的遺傳に勝る事數等なり、個人を完成する適應及び精神的陶冶に基づく一般の傳播を司る又遺傳過程は社會に於ては集合行為となり、茲に精神的に變形し内容豊富となる、其結果文明の進むと共に、漸進的遺傳は保守的の遺傳を凌駕するに至る、新式の政綱は單に從來のものより勢力をう、此狀態は人類の社會的發達の急速なる進歩に重要な關係を有するのである。

第三章、人類社會の競争

平靜は宗教的情操を憧憬す、經驗は社會の領域に於て之を求むるを得ない、平和を欲する心は切なるも、充ち足れる平和は公民社會の中には見出しかねるのである。人間の平和は、暴力、欺瞞に依りて行はるる抗争の表面に表はれざる迄にして、其競争の跡全く絶ゆるといふ事ではない。

法律と道德とは、暴力の競争、欺瞞を排斥

す。然れども其競争にして自由を確保し、暴力によらぬ競争の效果即ち所得、審判、決定的判決、選舉の結果を保護する限り、法律と道德とは利害の競争と理想の競争とを規定し且保進するのである。

社會的平和とは夫故に人間の暴力と欺瞞との屈從的狀態なれども、あらゆる利害對照の絶無を意味するに非ずして、競争の中止、言論戰の平穩でもない。若し競争のなき場合は寺院の靜寂で、あらゆる發達の止まりたる墓所の靜寂であらう。自然の外界に向つては絶えず又國外と國內の戰時狀態にある敵に對し暴力、欺瞞の鬭爭の續行する事につきては論外である。實に人類間には平和的競争は行はる。第三者の選擇及び判斷による競争、讓歩と和解に基づける競争、爭者同志の契約によりて決定の行はるる競争の如く益多く現はるのである。これ即ち社會的競争生活の特性である。

文明の人類にすらこの休止するなき爭が何

處より來るであらうか、又其動機は何であらうか。

これはダルヰインの所謂生物が他の範圍を得んために勢力を振はんとする動機と同一のものである。外界に對し無遠慮に遂行さるる保全の戰の極めて廣範なる範圍を與へらるといふ事は、無機物又は有機物の有害なる攻撃を防ぐに有效なり。

非常に廣範圍に互りて、人口の増殖、及び生存の欲望に應じて、自然物を奪取し又は生産せんとする努力は、日に新にして又益強くなるは、人間の飢渴を醫する爲である。

乍併かの自然に對する確保の鬭爭及びこの生産の戰ひは、例へ暴力により欺瞞に依るとは雖も、益人爲的となり、益合理的となり、集合的となり従つて亦固有的となる。

常に自然が人類に對し、人類が自然に對して爭ひを起すのみならず又人類は人類と爭議を惹起す、食物と富とのため、性的恩寵を得んがため、社交的地位名譽、評判を得んため

理想の勝利をうるため、意見及び信仰の確信を效力あらしめん爲に争起る。利得競争即ち所得の分配上起る競争、性的淘汰の競争、増加利潤及び效力を得んとの各種の利益の争、政治上、宗教上、審美學上且科學上の確信による争議は無數に起る、日日精神的自治の動機よりも起り、猶又物質上優秀なる地保を占めんため、又は社會的地位を得んため、善良なる且、公益的理想の名譽又は支配權を得んとの努力は、特殊の人間的方法で起るのである。

暴力と欺瞞とは此廣き鬭争區域に於て猶包擁的に決定すると雖、次第に人、財及び理想の價值が決定權を有して此價值は公益上規定せられたる決定及び淘汰過程上確定せらるるのである。

自然界に對する永續的保護確保の戦及び生産の戦の外に、敵の國家及國民に對抗する時期的對外戦、公民の敵各種の犯罪者及び浮浪人に對する司法、警察及び個人の持續する

内亂の外に個人敵對の無權力な正直なる鬭争買手、判事、價格指定人、公論、選舉權、官吏及び多數決により價值を認識せられん爲の競争愈起る。合宜的に高き價值を顧慮して遂行せられたる又公益を考慮したる人間特有の競争實施は人類即國民間に重きをなすのである。勿論この優透性は徐々として定まるものなれども、確在し、人類の最高の理想的又是物質的の所有、否あらゆるよりよき智的、道德的及び審美的徳性、宗教の高度の階級すら此高尚なる形態を採れる生存競争の淘汰に依るものなり。

動物類似の生存競争よりして最初の進歩起る、動物類似の野性的の鬭争は、猶姿を沒さない、野獸的性質は今日猶社會的競争場裡の動物的に残されたる範圍内にて淘汰される、然れども人類間の生存競争は最早動物的であるとは名づくるを得ない、動物界の淘汰と區別して、社會的淘汰は細密なる高尚なる方に向ひて行はる。

食物の動機、性慾、優逸的存在に對する努力最後に公民的自存と公益等としての、あらゆる外界の中にての自己保存の欲望は日々幾萬の争を惹起す、而して物質的富の進歩、政治上の權力、科學、藝術、宗教、教育及び言語の進歩は他の箇所にて詳細證明したる如く、此闘争の自然的淘汰より起るのである。

自殺の事實は競争の用意怠りなき自存動機の文明を創造する活動性に戻るが如く見ゆ、然れどもこは皮想の觀なり。自殺は既に社會的闘争に於て直接又は遺傳の途に於てこの道類敗するものなり、多くの自殺は自然淘汰の一現象なり。

人間相互間又は自然に向つて戦はるる無數の闘争は然らば何によりて決定さるるか、又社會争議の決定の要素は何であらうか。

吾人は答ふるに優逸權力にして其外になしと、

權力——併し乍ら常に權力のみではない殊に汎んや暴力に於てをや！

勝利の決定を與ふるものは、倍加的優勢そのものである。

稍強き黨派の主觀的優勢は一度は勝利をう併し乍ら勝利を博するもの鐵拳の力、爪牙、齒嚙の力ではない、又最早欺瞞に依るに非ずして、理由及び社會的判審を得たる價值の優透權、權威、學問、精神的教養、技術、資本社會的又は國家的藝術等の優逸權は重きをなす、社會的優逸關係は疾に主觀的方面に従つて特性の形態をとるに至れり。

闘争の決定に當り又或外界の暴力、僥倖の力、時勢の恩恵も基準的に考慮せらる。

自力によりて強き黨派は、若し夫に自然の經過及び社會的出來事の外部より左右し得ざる運命の助けある時は勝利は猶一層確實なり夫自身弱き戰士も、彼に偶然、幸福、殊に又平均以上に幸^{サデ}ある時勝者となる事もあり。

偶然是動物的發展の過程中多くの事を決定す、地殼の隆起と沈下とは例へば動植物の發達には非常なる影響を有したり、社會的發展

には偶然は同様に大なる併し屢特有なる影響を及ぼす、多數決といふ打破し難き權力に對しては、第一流の人士も建闘するも其甲斐なし。

人類が偶然を遊戲又は賭事の際の如く、彼等の利害競争の時淘汰の權力まで重視せるは注目すべき事である。結局吾人は利益、理想に關する社會的競争の結果を觀察せん暫時觀察するも社會發達のあらゆる特有なる消極的及び積極的事實を生存競争の作用として又自然淘汰の結果として露はるべし。

競争は往々未決の儘中止し且終息す、二個の互に敵對せし黨派は、孰れも決定的勝利をえざるため平和を締結す、暴力欺瞞の攻撃は防禦せらる、互に利益ある契約を結ばんと努めたる二黨は契約を締結するに至らずして相離る、二人の營利的競争者は、己れの側に市場を得んと主張す、二大政治的又は宗教的黨派は策略を行ふ、社會爭議の不決定に終る場合は、社會の進歩上失ふ所少なし。其争は双

方をして一層適應せしめ、相互間の適應せんとする傾向を生じ、利益を平均せしめ、其力を練り、強め、試験せしむ、生存能力ある黨派の間の社會的力量の平均は回復せらる。

他の場合は一黨は多少勝利を得、他の一黨の敗北を得るときなり。

勝者に對する結果は利益の獲得、所有の確保、支配權、權力、名譽及び權威の取得なり決定的勝者として、其勝利は將來の發達のために基準となり其上に擴張と模倣を成就す。

屈服者側に起る運命は、極めて種々あり。

多くの場合に於て、引續き破滅は社會的闘争の結果である、自然に對する確保戰に於ては或は弱き人間も、或は益多く有害なる影響動物植物は根絶さる、外界との生産戰に於ては、多量の物質はその自然的成分を破壊せられ、植物は破損せられ、動物は殺さる、乍併又肉體、生命、健康及財産につき不幸を見るは少數の人間でない、對外的戰爭に於ては數千の者斃れ全國民の滅亡するあり、種族すら

も現代に於て消滅す、犯罪者、詐欺師、阿諛者の社會に對して起すか又所謂内敵に向ひて社會が國家の強腕を借りて行ふ内部の戰爭に於ては、零落、死刑、自殺等は屢起る結果である。第三者の其間に調停の勞をとるなく又奸策、欺瞞、暴力なく、利益の交渉、平衡の爲に爭ふ二黨派は、不均等の契約を結ぶ事あり。困窮と失望、死、破産、解散、自殺、約言すれば人間の精神的、道德的及財産上の没落は、契約上平和を得んとする爭の結果として起る。高利、誘惑、取引の危険、不幸の婚嫁、有害の取引契約、不幸なる結婚など強者の和解の強制より起る犠牲を考慮すべし、營利の競争及び各方面にある競争は破壊の作用を受くる事小なりとせず。困窮の際の肉體的損耗、財産の消費、競争に堪へざる商社の解散、競争者の失望及び自殺は、社會的發達の道程中より全く消滅せざる平和的競争の結果である。

然れども破滅の場合を列舉したる其中に表

はるる此悲しき且動物に似たる人間の生存競争の結果は、進歩上消極的に影響を及ぼす。如何となれば其最後は生活不能力者、失敗者失業者、隱退者を生存といふ本より抹殺す、其中に、適者の殘存に有利なる消極的の淘汰が行はる。

破壊は社會的勢力の構成を妨ぐるを以て、其程度の昂進せる競争の結果として避けらる競争の破滅的結果は、或は互に有益なる適應即ち分業に理解の上教導するによりて豫防せられ、或は保險、保護、慈善によりて豫防せらる。其慈善に依りて、猶生存能力ある者を一層適所を得しむるによりて、自己の生存能力に基かしめ又社會の實體の一部を社會の爲に救はんが爲に、社會は猶生存能力ある者をして困難に打ち勝たしめんと試むるのである合理的なる貧民救助と慈善とは社會的淘汰と抵觸しない。

破滅の前述の場合は、法律と道德との間に暴力的又は欺瞞的破滅競争を排斥したる處に

も起る。不幸、肉體的、經濟的、智的、道德的の弱點は、例令暴行を束縛し、欺瞞が法律と道德によりて破壊せらるるも、滅亡破滅の結果とならしむ。文明社會の内部の破壊の競争結果は、道德と法律とが過度の人口の禍害と、理由なき暴論の禍害に有効に作用せし時完全に防禦し得べし。併し他の箇所にも詳論せしが如く頗る困難なる問題なり。

社會的生存競争の敗北の第三の結果は轉換にして、敗殘者のために餘生の條件の猶與へらるる處の或る他の場所又は他の職業に轉位する事なり。

動物學の淘汰論中子孫繁殖の現象に比するは、社會進化説の内地の移住及び移轉の現象なり。

自然を征服する保護又は生産上の戦は侵略及び轉換の事に充ちてゐる、驚くべき程の死物はその自然的位置より動かされ、水流はせき止められ又は誘導せられ、波浪は切られ、疎水され、電光は地中に導かれ、野生の動植

物は文明地方の領土外に放逐せらる。外敵に對する戦争は、大なる標準に於ける轉換に依りて屢終結す。征服せられたる民族は、民族移動の渦中に陥るか將又地方的所有を放棄す内部の敵同志又は内敵に對する戦に於ては危険物の自由の退去か又は暴力に依る隔離が、犯罪者の逃亡、拘禁は普通の現象である。乍併賃銀勞働者及び投機資本の競争に於て、政治的及び宗教的黨派の争に於ても亦、敗者の移住、從來の居所の放棄、新らしき住所の搜索は甚往々ある現象なり。移住と轉居とはその屢起る現象なるよりして社會的生存競争を特徴あらしむ。これ破滅の困難なる運命をして、故郷を脱出するといふ困難なる事には相違ないが比較的容易なる運命に依りて補ふ事となり、移住轉居は多數の生存を可能ならしむるなり。

これ人類生活の分布が地を超越して競争作用に基づくといふ其競争作用にして世界文明の基礎事象なり。人間は分業により又は場所

と位置との變異的適應により生存能力を維持するに多大の困難を有したりしを以て、文明の最初期に於ては其競争作用は比較的多かりき。

移住と轉居とは從つて、邦國及び地球の總文明のための被征服者の救済手段且社會の物質を維持する方策であつたのである。

社會は交通施設によりて移住及び轉居を便益にし、法律に依りて之を規定す。移住及び轉居自由の權限は、社會淘汰の現象の慈善的機能に歸由すべし。最早其場所に於て分業に従事するために、生存競争の餘地を與へられぬ時に、共に尠くとも完全に根據あるものとす、又人口過多の國又は時代に於て、人民が流浪生活を始めぬ中に、轉換的分業の適應をなす其時は無害なり。人口稀薄なる時代又は

不熟練の時代に、新しき適應をするには全く然りとせず、移住及轉居の自由は、青年及び中年者の自然に叶へる基礎權利に非ず、然れども現代の社會にとりては十分の理由あり、

併し大舉して移住の行はるる時は、例令敗者の自存手段として起る現象なりとはいひ、困窮の兆として止む時なかるべし。

社會的鬭爭の他の種類は變常的適應にして國民經濟學者は、勞働の分配、動物學者は適應的隔離といふ、個々の有機體及び有機界全體の種々なる種類と生存能力とは、この適應的隔離に基づくものである。ダーヴキン其他の人が證明したりし如く其性質に依りて、不等の請求權を有する實體により、あらゆる生存條件の利用と生存の最大限度が達せらるるのである。

分業適應の現象は、社會的生活現象として其方法明白なり且特別の形式を以て表はる、競争の各般に互りて勝れるものは、文明の進歩を表はす、互に利用すべき勢力換言すれば有益なる共同と交易との進歩即ち社會組織の集團は此優逸性に基づく、分業は社會的競争の結果、主として發達の度を増し、人類の絶滅及び破壊の戦ひも小範圍に限らる。

變常適應の形式は種々ありて次の如し。

先第一に吾人の遭遇するは轉換的適應なり下部に在る部分は恐らくより光輝なきも併し先多くの生存の見込を與ふる他の生活條件に依頼す、然れども其部分は生業の共同者の一人でなく何等特殊の分業を行はず、茲に於て動物界、植物界に於けるが如く、種々の生活生ずるも最早生活共同體ではない。

適應的隔離の第二の主なる場合は、有益にして、社會及び交通を形成する適應即分業是なり。分業は變則的に適應せる下層社會を自ら維持せしむるのみならず交通の加入者として、共同社會の成分として、より權力ある集合體に加ふるのである、分業は故に著しく社會組織に叶ひ、勝者及び強者に、被征服者弱者に有益なると同様に有益なり、文化の發達は夫に基づく所多く、人間も漸次其域に達せしなり。

この變常適應に二面あり、即ち狹義の分業にして嘗ては種々様々なる異なれる適應にし

て然る後、交通、相互の勞役、交換、協同、和解、團結、同盟等の所謂集業に依りて他と生活の共同のため結合する事なり。

社會的分業は半ば勝者の強制のために起り半ば自由の理解及び隨意的適應によりて起る吾人は夫に従ひて社會的競争の影響を自由及不自由の分業とに區別す。

自由ならざる適應的隔離は暴力的又は欺瞞的争議の結果として起る、故に自然との生産戰に於ては、利用しうべき勢力、動植物は人間の補助手段及び助手にまで致さる、又人間の財産の種々の用途に適應せる財となり、互に結合して、集合體をなし、常に人に有效なるのみならず、夫等も又人に依りて養護され且維持せらる。民族戦争及び暴力欺瞞の角逐より中古の社會に於ては、同様に自由ならざる分業起れり、以前殺害せられたりし俘虜は、奴隸となり、全民族は奉仕階級に抑壓せられたり。多數の民族は暴力、脅迫、財産の優逸權力、高利、信仰的欺詐により憐れむべき貢

獻賤民 (misera contribuens Plebs) に引き落され

て、世俗的にして宗教的な貴族により不自由の分業、奴隸、庸役、賃銀奴隸の身分に置かれたのである。猶古代に於ては暴力、欺瞞に依る戦争多かりしを以て、幾世紀、幾十世紀を通じて、勞働の束縛、貴族の君主的奪略は民族の歴史に普く記載せられてある。この分業は動物的絶滅戦と、個人的優者即ち貴族政治と、自由なる分業との結果を來したる戦ひとの間にある階段ではない、過渡期に於て此不自由なる適應的隔離は其價値を有したのである、其は著しく社會組織的となり、例令強制的なるにせよ逃亡せんとする者を維持し、各種の勞働團體を組織して人口を密にし、強固なる團體を作り、敗北者の滅亡を防ぎ、支配者をして、武力、主權、管理、教育等の構成の爲の最初の餘剩を確保せしめたのである。一層豊にして高尚なる社會組織は、然れども社會的淘汰及び文明的創造の高き階段にある自由の適應的隔離(分業)より起るのである。

る。

自由の分業及び集業は、決して自然と對抗する保護生産の争の結果ではない、此闘争は例令勝利あるも人間の財産の破滅と自由ならざる事業の中止の因となる、自由の分業又は集業は、通常外的競争及び心的競争の暴力及欺瞞の競争よりは生ずることない、政治的、經濟的、人身的束縛及び搾取は例令根絶せしめざるも外的及心的競争の普通の結果である。只古代に於ては、民族戦争は一層大なる共同國家を造らんと、自由なる同盟を爲すに至り内亂は、争闘せる階級、門閥者及び宗派の一般的自由をうるに至つた事が稀に存するのである。分業の效果並びに社會の效果を擧ぐるには、契約に依る相互の理解ある交渉と、所得、支配權、名譽、權力、同胞間の認識、尊敬と愛とを得んとする競争は大に有力なり。

不公平ならざる契約は、互に有利なる適合の交換をなさんとするに基づく、民族及び個人は互に契約に於て、讓歩し又は從來の位置

を變更して與へ又授けらるるなり、契約によりて締結さるる平和、社會に齎す利益とは、例令分業の契約なりと、集業の契約なりとも此契約によるものである。

双方の爭者間の第三黨の決定する競争——利益、選舉、位置及び其他の利害的競争は、個人として又は公人としての判斷者、選舉者が競争者の價值及び、競争の成績及び結果に準據して決定する程、勞働の自由分業及集業は益々效果多き事を立證す。故に競争拮抗は封建時代の批評家の、現代行はるる資本的競争を、社會主義の原則より各種の競争を否認するが如き政治的及び經濟的奴隸に等しき競争の閉息として概して社會的に有效なり。例令此競争が十分の敗北なしに終る時も、各部をして繼續的變化と適應的改善とを促し又個性上の強者側の發達、弱者の捨てたる場所及び位置の特殊利益の尊重するに至らしむ。若し競争にして敗北を齎し、時は、此影響は強制的である。利害及び理想上の競争の敗北は、

一層よき適應即ち職業の轉換、黨派の計畫改良又は變更、商業の改善擴張、又は敵對者及び第三者との同盟、和解又は共同を爲すの餘儀なきに至らしむ、茲には異りたる且善良なる適應あり、彼處には新らしき共同あり、連絡、交通は物質的、政治的及び其他の利益競争の影響である。個人の専門的教養と多岐の教育、社會の交通、交換及び共同作業は、法律道德によりて規定せられ且暴力及び欺瞞に陷るを豫防せる競争の結果である。能率向上し、不練は改善せられ他に有益なる方策を講せられて集合力の最大限度生ずる。

競争しつつある勞働力の分配と集業とが自由にして且事情に拘束せられざる配慮を拂ひて行はるる限り、凡てこれは一層速に、包括的であり又完全なるものである。夫故に社會的淘汰は自由の契約競争及び抗争の形態となりて、社會構成的實に文化的效力の絶頂に達するのである。社會的淘汰の此形態より最大なる集合力を除かるるが爲に、自由なる理

解を基とせる競争且各般の抗争と關聯して相違なく自由は生ずるのである。

競争の利害が高尙になる程、物質的利益に就きては單純となり、高遠なる理想の勝利同胞の愛敬をうる事増大すればする程、文化は向上し、共同觀念は涵養せらる、これ各種の競争が、客觀的に貨幣及び名譽の奪取的利己主義に、根柢を置いてないからである。目下我等は此最高にして且最も高尙なる形式の競争の勝れる事を遺憾乍ら、政治上にも國民經濟上に於ても到達するに至つてゐない。

社會科學の範圍の淘汰學說の現存的實施は我等に社會的淘汰の形式に於て一般に特性ある事實を表白してゐる。併し社會の最も重要な現象、就中社會組織の事實、變化、適應遺傳、競争動機、競争決定及作用の特殊の形式を説明する事を、社會科學は同様に明かに説明すべきである。これを理解すれば、全體の文明——單に一部分でなく——は、甚だしく一般の發達機關の產物として又自然淘汰の影響

として、部分的の退歩を包括せる進歩競争の結果なりとして表はるのである。夫に應じて他の箇所にて社會的發達の規則を次の如く作りたり。『創造の最高階段たる進歩的社會組織は(文明)とは、常に本能的緊急需要を満足せしむるのみならず益々多く高尙なる物質的及び理想的生存權利を得んがために、個人的團體的自治の動機に依り、繁殖動機により、自己利用により、公益的の改善の努力に依りて自覺され、益々新にせられ、個人的及び團體的勢力に依りて、或は相互間に、或は外界に對して、人間の精神的、肉體的及び財産の能力を以て、法律と習慣とに依りて定められた競争組織の中にて競争の行はれたる、人類の生存競争及び利害の競争の不滅の結果である。』

個人としては、相對的に最良の適應を鼓舞するのみならず又支配、發展及び遺傳にまで及ぼし、夫に反し相對的に不良の適應を排し改善の餘儀なからしむる事を促し、總體とし

ては、人間の生存競争の集合的實施のために精神及び肉體力が増加し、其結果肉體的勞働者の多種なる編成並びに密接なる共同社會と其所屬の財力加はり換言すれば益々多くの社會組織、公民社會、文明が発生するに至る』是を以て尠くも、文明は自然淘汰の原則に依りて原始的に説明し得たのである。

社會の發達の範圍内にて自然淘汰の效力を是認するは、道德界の秩序を否認するに非ずやと人は言へり、乍併消極的淘汰即ち不適者の排斥及び積極的淘汰即ち適者の勝利は『道德的世界批判』の唯一の實驗的に認識すべき事柄なり。社會的淘汰の機能は道德界の向上のための人類の進歩に效ありとす。

社會的淘汰は惡を保護する事なく又之を壓服もせぬ、或時期はむしろ、強き權力に支配を許すよりも一時惡の支配に委ぬるのである。社會淘汰に依りて説明せらるる事實に於て、社會科學的淘汰學説は夫がため責任ありとなし難いのである、自然的淘汰の最終の作用は

最も強き生存能力ある集合力としての文明社會の構成にある、此力は『道德的世界秩序』の本質的成分として有效なるその條件なくば出現すること、存続すること、又維持することもないのである。

社會の人々の愛と公益觀念なくば、社會の維持は困難である。

困難せる弱者の保護なく、合理的なると同時に教育的且改善的貧民養護に依る弱者の新適應なくば、使用しうべき精力は、社會より失はれやう。溫情なくば亦強き要素も亦、公益觀念に有害なる狀態に陥ることにならう、夫故に社會科學的淘汰論の假定としての不幸及び貧窮に對する冷靜さをも立證しうる能はざるに至る。

各自及び其職業範圍内の各個人の自由的自持及び活動性なくば、社會は只習慣的に反應する時にのみ強きを以て、其社會は弱いのである。

總體維持の立場よりして、變化、遺傳、競

爭實施、競爭決定及其結果の、社會的、外部及内部的に強制する秩序なく、絶滅競争を除外したる處の秩序なく、利害又は理想を得んための效果ある競争を許し、相當の成果を確めしむる事なく、又道德法律もなく、宗教も良心もなき時、尨大なる集合力の構成及び維持をなすは、社會は不可能の事である。

是等の秩序に依り、野蕃なる、奪取的なる分裂的なる、動物的なる生存競争よりして、文明的、社會組織的、協力的なる人類の生存競争と成るのである。團體維持の見解より、個人的自存行爲を規定する法律及び道德の是等の秩序は、社會的團體の國家的又は其他の競争に必要なが如く、國民經濟學にも必要なり、國民經濟上の自由放任 (*Laissez faire*) の無政府狀態も、淘汰説の制限 (*a limite*) の眞に社會科學的形式によりて排斥し得らるべし。所謂道德界の秩序の目録の本質的事實は、此學説は道德上の世界秩序、漸進的道德の完

成、倫理學の世界的學報の證明材料たるを否定せざるのみならず、むしろ説明し其根據を明確にするのである。宗教心は、加之社會淘汰の道程に於て、その發展と其共鳴とを與ふ如何となれば一方に於て、苦惱、悲痛、困窮など常に、人類の生存競争に膠着し又膠着せんとする經驗、他方に於て、社會的淘汰の太古の勞働より起りし比較的完全なる經驗は、人類の精神界に於て宗教の二極端——贖罪の欲望、完全性への努力、畏神、聖化の希望——を醒し、警むに尠なからず效驗あつたのである。社會的淘汰に於て人の體驗なくば、宗教性の事實をその實驗的方面に従ひて心理學的に説明する事はなし得ないのである。

利己主義の絶對的權限は、正解された社會科學の進化論より見れば、如何にしても説明なし難く、又正當なりとするを得ないのである。動物學者の所謂『水螅スナエヒの無我より狼の利己主義迄の進化』は或は一の進歩たるべし。乍然狼の利己主義、夫よりのみにては社會は

發達するを得ず、自然的淘汰より生ずる最高の權力まで、赤裸なる、凡庸なる人間（利己主義の甚だしき）の道德性よりは發達は起らない、水草を追うて、游牧民と游牧民との交渉時代は『自然的狀態』であつたが、此の狀態は文明社會狀態の對照であつたのだ、總體を維持するため法律と道德に依る自由の制限と共に、爭鬭主體の存立のため各人の力一杯の自己活動及び自己主張と、全體に對して服従するといふ二個の條件の缺けたる場合は文明社會は兎に角不可能の事である。『自然的創造』の過程にて、文明の生ずるものとせば、愛と服従、法律と道德への服従、共同の生活條件の尊重を起さしむると共に、他の事情の自己配慮の勢力と、脊に腹は替へられぬといふ原則を確むるに相違ない如き事情が生ずるに至るのである。

權力は正義に勝つ (Macht geht vor Recht) と。此文章は、自然的淘汰の社會的效力を認むるならば、論據はないと人は言ふのである

乍併この歸結も全く誤りなり、法制は歴史的產物なり、孰れの時代も多少不完全にして、其尊嚴を傷くる場合あるを免れない、乍併法制は、社會的淘汰の完全なる強制により、法律上完全となれる國民の勝利に依りて、必然的に強めらるるのである。

夫に反し社會科學的淘汰論に關し、法律及び權限の今日も猶擴まり居れる誤謬の解釋、即ち平等は先天的人權にして、正義の最高要求なりとの解釋は、甚だ讀し能はぬ所である多くの社會主義者は、この正義の原理に基づき居るも又其學說の大なる弊害も此點にあるのである。

競争すべき力は先天的なり、個人の天賦的勢力は必然的に不平等なり、我等は必然的に等しからずといふ、如何となれば個人的性質には、古代の淘汰の殘果たるものを遺傳し居り、此淘汰は引續き不平等を造り、同等に大きい勢力も又同種の勢力も、社會的生存競争よりは起らずして、稍強きものと、稍弱きも

のと、甲に或は乙に適應するが故に、常にかかる不平等のものを生ずるのである。單に過去ののみが互に遺傳する不平等及び不同種のものを集むるのみでなく、未來も亦夫等のものを常に新に、社會的淘汰より生ぜしむるであらう。全く平等なるもの又は全く同種といふのは成就し難いのである。

絶對的平等は、淘汰學說に鑑照せば、社會的學說として表現するに過ぎぬ一種の空想として思はるのである、先天的平等の學說及び此平等に立脚する處の社會主義を、ダルヴィニズムに連繫するは甚だしき誹毀である、進化論は、かかる誤てる非難を排する必要は殆ないのである。

然れども平均の意味の平等はある、此平均は優秀者を共和民主的暴政によりて壓服するの意でなく、むしろ優秀者をして益々向上發達せしめ、其結果公衆のため優秀なる力を用ゐ、有爲なる成績が、財産、名譽、能力、威望及び尊敬の其長所に適當ならしむる點に存

するのである。

社會的淘汰は其他、生存するための財の競争上の各人の權能といふ意味の權利の平等といふ形を有す、又特許權の創造といふ意味の平等といふ姿を持つ、此權利は各般の天賦の氣力の公益的使用を益々多く同一條件の許に凡ての者に許す時のみ成立するをうべし。生存競争に於て、自己維持のためにのみ使用せんとする權利は何人にも許容せらるる事ないのである。是即ち權利の平等で、天賦的人權として適するものと記さるべき種類のものではない。

特權又は特許權の益々消滅することは、實に經驗の示すところである。各自が同一條件の許に、個人的能力の力を以て、あらゆる財又は利益のために、平和的競争をなしうるといふ意味の平等は益々效力を認められてゐる貴族の特權は落ちた、あらゆる利得の競争には皆抗爭しうるのである。官署も近時、才能に應じて誰人にも門戸を開きたり、是等の經

驗的事實は、誠に自然的淘汰の必然的結果である、只漸次に各人の能力を社會百般の競争場裡に延さしめ、以て一般に能率の益々多く向上せしむる要求を有效ならしめる社會のみ競争に打ち勝つに必要な精力を生存上得るのである。生存能力の歴史的により高き尺度にまで國民力が向上しつゝある所のある特權は失はるのである。夫故に凡ての者は平和的競争をなすを認められ又才能に應じて、勝利の結果を享受する權利を與へらる、法律に對し各人の前に陳述したる平等は、社會的自存の權力假定である。かかるものとして、先天的特權に非ずとして、平等は亦阻止せられず且益々純粹なる方法に於て一貫するのである。平等は原理に非ずして必然的歴史の產物なり各人及び最も良き團體を生む社會的淘汰の強制の表現、夫故自然淘汰の確證である。特許權の否認は、社會的淘汰の活性の障害を撤廢するのである。

至る處生存の財を競争する權利のみならず

益々多く各人に與へらる。社會は各人に同様な條件の許に、競争を可能ならしむる様に益々多く積極的の平均の努力を爲すのである。國民が疎野にして且無教育の社會は、各人に教育の或限度を確保せる或他の民族競争に征服せらる、一般的國民及び青年教育のため努力中には、無限なる不平等に對する強き反對思潮があるのである。全く疎野なる國民は國家のために選手として又兵士としても、又生産者として工業勢力の爲にも、皆或る平等なる教育が與へらるる事なく、又貧困なるものの有能者を高き活動範圍に至るべき教育の道を得しむる施設をするに非ざれば、勝利ある結果を招致するに至らないのである。集合體としての社會は、遺傳的不平等の甚だ深き階段に弱者の陷るのを忍び能はぬのである。社會は弱者をして、勝利ある要素及び高き階級にまで昇進せしむべきであつて、其點に人為的平均も存するのである。

出來うる丈少數者が高き教育と高き生活を

達しうる爲でなく、成るべく多くの者がその生計の高き尺度を又各皆、出来る丈其成績に應じてより高き生計を達しうるといふ事が、夫に依りて公民社會が最高の生存力を達する平等の道である。夫故に彼等の利益は上級者を凡庸の中へ降下せしむるに非ずして、下級の者を出來うる限り中等階級に、又各階級の最も能力ある者を、最高の社會階段に達せしむるといふ事である。此平均は明かに淘汰學說の促進にして其否認ではない、必然的結果であつて、社會的淘汰の撤廢ではないのである。疑問視せらるる傾向は疑もなく、平均の傾向で、眞の貴族政治を效力あらしむる處の民主共和主義である。此方法に依つてあらゆる大政治家の中産階級を強固にせんとする努力を意義あらしめ、下層社會の運命の改善を促進するにつき眞なるものを適切に行はしむべきである。

煽動的社會主義は抽象的の平等主義及び權利主義の上に、其主張を有するを以て何事を

も成就し得ないだらう、何故といへば其理由がないからである。賃銀勞働者の高き教育と生計を達すべき又歴史的に可能なる勢力をば社會主義は淘汰論の助けを得て、總體維持の促進として、又社會の生活力の條件として、確に基礎を築く事が出來やう、若し同主義が此道を取りさへせば、夫に依り民主共和的社會主義が顛覆を疑はれたる誤想と空想とは、全く自ら自滅するのである。如何となれば然る時は、抽象的平等を造る事も、遺傳的に附着せる先天的能力も、各人の所得の平等も、高き成業に相應なる高き價値の破壊も、指導的地位に生れ且教育ある貴族を放逐する事も競争及び勞働競争の否認も、勤勉家及有能者の人爲的阻止も、分業に於て既に得たる大なる集合團體力を再び解散する事も、國家又は貴族政治の否認も又法律上及び革命的種類の突發的全破壊も論するの要ないからである。如何となれば皆是れ、社會淘汰の不變的法則に違背するからである。舊社會と民主主義的

勞働者運動の間の平和は、社會淘汰法則の發達史的要求上、相互間の讓歩に依りて起るものなる事を、吾等は確く信じ且千八百七十八年十月以前に既に言明せる確信である。これにより社會民主主義は清められ、社會を倒壊する疑念より免れうるだらう。かくて舊社會はあらゆる長所を保存し、就中革新的發達の徐々たる進歩の度を確保するであらう、共產主義的平等は、總ての發達の閉息に該當するものなるが、社會的淘汰は、下層階級の勢力及び自由の發達を、公民社會の増加すべき權力の必須なる前提として立證する故に、眞の社會進歩は此淘汰説によりて惠まると同様、正解せられた社會科學的淘汰によりて否定せらるるのである。

生存競争の物質的前提の平均への事象は、社會的淘汰の秩序の中に深く基礎を有してゐる、文明のより高き階段上に、個人的財産に依らざる個人的能力を尊重することを認むる公法によれる益々多くの施設が成立する。社

會的發達の此現象は、遺産によりて、卓越せる個人能力に基づかざる偶然的の個人優逸權を後に多少とも制限するのである。經驗に依れば、國家、團體、教會、學校、科學の施設は益々擴張せらるるを見る。是等の設立は、從來は多少其家族又は個人の物であつたのである。現時國家又は自治管理が公法上に依りて存在する處には、従前家族の財産又は個人及び家長といふ優逸權に基づける、世襲權又は、個人支配權があつたのである。公法上の國家及び自治管理に依る是等の施設には、近代益々多く加はり、生産業、交通運輸、卸賣業も之に加はれり。郵便、鐵道、電信、水道道路、投棄物の清掃、銀行制度は既に公法上の若くは、公私混合經營の範圍に多數存するのである。是等の全體の發達は、經濟的に觀察して、實用社會主義として、強制的共同經濟として、競争のための公法上の組合として半ば物質的需要を直接起す所の組合として表はるのである。誰か理性ある人は既に永く

承認せられたる國家並びに自治管理の施設の
此實用社會主義を全く否定するか、只其正當
なる限界に就きて疑問論争とが生ずるのみで
ある。一般にこの主義は益々發達し、今は既
に公有財産の幾十億までも具體化せらるるに
至つた、然れども此發達は個人的財産優逸權

の偶然より、個人的能力の多分の解放を許容
せしめるのである。國家、公共團體、教會、
學校、大學、組合及び其他の財産に於て、即
ち巨額の物的資産は、子々孫々に總體財産と
して乃至は集合資本として遺さるのである
是等の財寶を取扱ふに、個人的有能者は個人
的財産の勢力なしに召聘せらるのである。個
人的有能に、其當該施設のために最大の物的
財産をも管理を委ねらる、教育を達成すべき
各個人の才能は國家のために又公設の自治管
理のために、私有財産なくも最高の影響と適
當なる長所とを、所得、名譽又は權力に於て
獲るをえん。個人的營利競争に定着する物的
經濟上の不平等の作用は、社會發達の進行に

より、國家及び自治管理の所屬施設物の發達
のため訂正せられ又除かるだらう。國民經
濟上、公法によるかかる設備が益々多く増加
すればする程、私有財産の不平等は、有能者
の勝利をうる障害としては破砕せらるるに相
違ない。

是等は現在存するだらうか、幾分工業界に
又恐らく商業界にもあり、農業界には見出す
こと難し、されどもここにも徐々として漸次
認めらる。工業の發達は主として皆大規模に
創始せらるるを要する點に於て發生するので
ある。點燈、燃料、水道等は團體施設となれ
り。交通運搬も益々多く國家施設に替りつゝ
あり。世紀をふる毎に、目下の私工業の他の
範圍に於ても、國家又は公法上の自治管理が
利益多かるべしと思はるるもありうべき事だ
ある。單に其大をなすの不十分なる爲に非ず
して、其不確立と個人的經營方針の弱點のた
めに、個人的資本は此所彼所と散在し、益々
薄弱となるからである。集合的施設財産は、

任意なる大さに於て、個人資本の個人的利益を離れ、維持性あり、公法により訓練せられたる勞働を以て組織的に設置するをう。公法による直接社會的施設の制限ある設立の方針は、自然淘汰の副産物である。此方針は漸次強勢なる勢力、一般的需要、生存能力ある權力の大なる標準、より大なる美術過程を残すのである。私有財産と能力とを引き離すに該當する此現象は、故に社會淘汰の法則にすら設定せられてある。

只集合經濟に依り、物質の不平均を凌駕するの道は、かの空想的社會主義ユートピアの要求する物とは何等關係なきものなるを忘れてはならぬ大なる財産は壊滅せられずして、益々よく又繼續して確保せらる、施設の集合經濟の成立の可なるは個人的又は小規模のもの等凡てにあらずして、只大にして一般的なる眞の社會的機能のためにして、社會的需要の又技術の標準とに従ひてのみ存在の價值あり。公法的集合經濟の方向の突然の又一般的動搖は、小

勢力及び個人的勢力に小競争を許し、大經營が徐々に發達すとの自然淘汰の本質に戻るのである。

個人の自由は、社會淘汰の學說と合致せざるものに非ずして、往々その必然的結果として表はるを以て、社會淘汰の學說に依り根本的に説明しうらる。

人類社會は只自がその勢力を完全に延ばすに適當なる機會と、動機とを有する事に依り大なる勢力となる。個人の行爲動機を閉止する其社會は滅亡するのである。社會總體の各分子が完全に其力を發揮しうべき如き社會のみ、其最高の勢力をうると共に永存しうるのである。

社會淘汰が其作用上、益々強き威力を、益々競争に奮へば奮ふ程、國家的維持及び秩序を保存する條件の中にて、各個人は自己を練磨し、發達する必要大となる。自由の高大なるといふのが従つて原則ではない又先天的特權でもない、夫丈けより高き文明に達すべき

不滅の結果と條件とが、益々自由の精神に必要なのである。公民的の自由の歴史之を證してゐる。

各團體の自由の活動は、國家及自治體の範圍内の高き文化の要求のみでない、公民の活性なき國家、爲政者の主義なき、官吏の責任觀念なき、言論の自由なき國家は、恰も私經營商取引に於て、主人が機械的となり、賃銀勞働者が、怠惰に流れ且思考を缺くが如くに微弱となる。個人の活動性と、團體の一員としての責任と自由とは、より大なる集合團體を構成すべき爲に、絶對的要件である。社會主義の欲する其改革は、集合的に組織せられたる生産の部門の内部にて、分業者並びに優秀勞働者間に、問題視せらるる、個人的業務に存するよりも、より以上の獨立心、營業能率、勤勉、責任及び管理を確かならしむといふ事を立證しうる以外に、社會主義の實績を説明し難いのである。個人的自由を排する各社會主義を放棄することは立證せられた、然

れども亦集合生産と加入者の個人的經營能率と一致する事も證明せられたのである。

競争、競賣、抗争を否定する各社會的學說を放棄すべきは勿論である。競争は完全性をうむ最高の形式である。あらゆる競争を排除するは、即各のより高き文明の否定である。殊に優秀なる敵手との競争を排すること——例へばアングロアメリカ人との國際的競争の全部の撤廢は——文明に戻るのである。

社會的淘汰説は故に各種の競争を除かんとする共產主義的傾向を、絶對に排斥せねばならぬ。人類社會より競争を排する者は、進歩を否定するに當る。優劣を争ふ意味の競争は文明の増進上捨て難き原則である。何等か競争あるその社會狀態は、暴力欺瞞に依りて弱者の虐げらるる無競争の狀態よりは高いのである。茲に開陳せし考慮は同時に、無競争の理想郷及び古代の社會狀態の無競争を讚美するに對して絶對に反撥するものである。競争とし云へば、吾人は一般に私有資本の

營利競争なりと解す。此競争は確に有效である。その競争を中止するといふは、國民經濟の生産力をして、數百年も低き狀態に逆轉せしむるといふに同じ、退却に非ずして前進を要す、競争を中止せしむべきに非ずして、寧ろこれを確乎とし、規定し、より完全となし一般化せしむべきである。

公法上の施設の集合的經濟の範圍内にて、經濟的に效果ある、規定せられたる、恐慌と離れたる、より高尚なる、一般的なる競争——永續的に受領すべき給料階級のためのみに非ずして、名譽、尊愛につき——を許容するを立證するを得ば、又これが漸次に行はるる限り又公法上規定せられたる競争は、完全に權根を附與せらるるに至らん。これをこそ選擇せられねばならぬ。

物質的營利競争のみ有效なる競争として、團體を奮起せしむるといふ事は、明かに誤りである。國家、教會、科學と學校に於ける競争、公務の競争は、誰にも其反照を明かにし

てゐる、如何となれば茲にも競争に依る公務は、理想的利益を促進するからである。

又個人的資本の營利競争は常に活潑なりといふ事は、決して證明せられぬ、只包括的に資本家は、專賣、同盟及び團結に依る競争を否定するのである。賃銀勞働者の競争につきては、猶期待せらるる事甚多く、發達の高點には未だ確に到達してゐない。公職に官吏が賃銀勞働者の如く熱心に競争し得ないと、誰人も主張するを欲しないだらう。又國家機關及び教會機關の長官が、功名心から大成功を爲さんと刺戟さるること、恰も資本家が利慾より成功に誘致せらるると同様なりといふ事は、恐らく決定的事實なりとは見做すを得まい。

金錢の利益のみ目睹とする決定的競争は、道徳上惡影響を及ぼすとは確である、此競争は物質的時代精神を養ひて高尚なる欲望を遠ざける。恰も人類のより高き道徳的發達は故に、社會的進歩は、單に金錢競争にのみよら

ずして、他の競争にも依るものなる事を要求す、又公設による物質經濟的效果以外の競争は、個人的企業に於てよりも根柢を薄弱にしてもよいといふ事は證明し難いのである。

是等凡ての事は、概して競争を排除する事は、確に一のユートピアとして考へらるると同程度にしか眞と思はぬ、不償的名譽官衙及び信頼せらるべき位置の候補に於ても猶影響尊敬及び愛を競ふのである。若社會主義が競争を簡單に否定せずして競争の一層よき、一般的な效果ある、高尚なる形式を出來うる限り實證せざれば、社會主義は最初より其存在を失うてゐるのである。此證明を爲しうる時始めて各の危險を失ふ事になるし又社會生活の永久的原則の中に立つ事となりはしまいか又此主義は競争の徐々たる改良、私資本主義的物質的競争の漸次の補充を證し且實現するをうるなるが故に滅亡等は論するに及ばないのである。只あらゆる競争の否定、私資本の競争の歴史的關係の權限を、否定するは社會

の永久的基礎の上にるか將又歴史的基礎の上にるかを論議するが如きものである。資本主義的競争は、最終の、最高の又唯一の經濟上の―泥んや政治上の―競争ではない、合併經濟上の競争のこれ以上效果ある又高尚なる形態を證明するものなき程長期權限を有したのである。時代を支配する資本主義の萬能も、無競争よりはよいのである。

吾人が前の如く陳述せし事は、變説ではない、又昨日の日付を有したものでもない、既に千八百七十八年十月以前に著者は明かに、社會淘汰論を作成して社會主義の誤謬と感ずる點を批評したのである。

社會と社會發達の基礎的事實は、一般の發達法則の特有の現象及結果として證明し、且淘汰學説は倫理の永久原則及び社會の實際を危くし、脅迫せざるのみならず却て之を證明し且強固にするものなる事を尠くとも裏書したる事を望む、この見解の専門的又は十分なる理由は、拙著「社會的團體の建設と生命」の系統的解説に依らん事を切望するのである。